

2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)： 黒木英充

1. 共同利用・共同研究課題名	
和文	中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存
英文	Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies
2. 研究期間	2010 年度～ 2012 年度 (3 年間計画)
3. 共同利用・共同研究課題を実施する専任教員	(氏名) 黒木英充 (役割分担) 代表・全体の統括・レバノン、シリアの都市の歴史的発展
(同上)	(氏名) 飯塚正人 (役割分担) 副代表・中東諸都市におけるイスラーム運動
(同上)	(氏名) 近藤信彰 (役割分担) イランの都市の歴史的発展
(同上)	(氏名) 高松洋一 (役割分担) トルコの都市の歴史的発展
4. 共同研究員採択数	10 名 (国内 5 名、海外 5 名)
5. 共同研究員に求められる役割分担	レバノン、シリア、イラン、トルコの代表的都市 (それぞれベイルート、アレppo、テヘラン、イスタンブル) を対象とした標記課題の歴史学・地理学・人類学・政治学・都市計画学的な研究
6. 共同利用・共同研究課題の概要 (400 字程度) (※要覧等広報の際にも利用・掲載します。)	
<p>レバノン、シリア、トルコ、イランの主要都市を対象として、近現代における都市空間の拡大を人間移動の結果ととらえ、そこでいかなる多民族・多宗派関係が形成されてきたかを明らかにするとともに、その共存関係が現代の政治・社会運動をどのように方向付けているかを解明する。そこで重視されるムスリム・非ムスリム間の共存関係の分析は、当該中東地域のみならず、広く地球社会全体のムスリム・非ムスリム関係、さらには多民族・多宗派関係一般の望ましいあり方を構想するための有効な知見を提供することをめざす。歴史学、地理学、人類学、政治学、都市計画学といった多様な領域を専門とする研究者を国際的に組織し、ベイルートの「中東研究日本センター」を拠点として調査研究を実施する。研究成果も同海外拠点を利用して国際的に発信する。</p>	
7. 研究の目的 (400 字程度)	
<p>アラブ史の泰斗 A.Hourani は、かつてレバノン近現代史を規定する要素として、山間部農村の族的団結に基づいた共同体的イデオロギーと、海岸都市部の多数の宗教宗派が共存する開放的社会に根ざした多元主義的イデオロギーとの対立・相互関係を指摘した(1966 年)。都市に求心的に向かう人間移動 (国内山間部から都市への、さらには国境を超えた人口移動による都市空間の急速な膨張) は、20 世紀後半以降も激化し、今日レバノンの首都ベイルートは二つのイデオロギーがそれぞれ変容しながら衝突するアリーナとして立ち現れている。イブン・ハルドゥーンの文明観にも通底する Hourani の社会観は、ますます強い説得力を得ていると言えよう。</p> <p>本課題は、ベイルートと他の中東の主要都市 (イスタンブル、アレppo、テヘラン) において、19 世紀以降の都市化の過程で多様な民族・宗教宗派を背景とする人々が都市空間にどのように流入・定着したかを検証するとともに、そこで対立・紛争も含めた多様なエスニック集団の共存関係がどのように形成されたかを解明することを目的とする。さらに、かかる多元主義的都市社会において発展する政治・社会運動が有する特徴を明らかにすることをめざす。</p>	

8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義（400字程度）

日本における従来の中東都市研究は、専ら前近代の時代を対象にした歴史学的研究が中心で、イスラーム政権による統治の性格を解明すること、並びに支配に対抗する社会組織の実態を明らかにすることに関心が寄せられてきた。一方、現代の中東社会を席卷する政治運動・社会運動の研究は、イデオロギー分析が中心となり、運動の主体たる人間の空間的・社会的な動態を総合的にとらえて、それらを現代の都市化の過程に位置づける作業は十分でなかった。従って、これら二つの研究は相互に関連づけられることなく、断絶した状態にあったといえる。また現代の政治・社会的諸問題を長期的射程のもとで考察する政治文化研究の視点も欠落していた。

本課題はこの欠を埋めて研究を新たな水準に引き上げるため、AA 研がこれまで推進してきた「他者性」をめぐる中東・イスラーム研究と、アジア・アフリカを幅広く見渡した政治文化研究との蓄積を踏まえ、ベイルートの研究拠点「中東研究日本センター」を足場に関係研究機関と連携しながら調査・研究を展開する。そのためには国際的・学際的な共同研究態勢を整える必要があり、現地感覚に直接根ざしたものでなければならない。ベイルートは、激烈な振幅を持つ現代中東政治の中心の一つであるとともに、極めて多様なエスニック構成を持つ国家の首都であり、なおかつ今回対象とする中東地域の間地点にあることから、研究拠点として最適の位置を占めている。

9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果（400字程度）

研究成果を英語で報告書として刊行する。

ベイルートの「中東研究日本センター」を研究拠点として利用することにより、ベイルートを対象にした調査研究はもちろん、そこからアクセスが容易なシリア、トルコ、イランの都市に関する調査研究も効率的に実施することができる。研究の途中経過を共同研究員が相互に確認し、批判し合うためのワークショップや会議も「中東研究日本センター」で開催することにより、現地社会に研究成果を直接発信すると同時に、課題の枠を超えた外部からの助言を得ることも可能となる。ベイルートの関連研究機関のみならず、シリア、トルコ、イランの研究機関ともより密接な協力関係を構築することができる。

本課題は、中東地域の都市のエスニシティを研究対象としていることから、必然的にムスリムと非ムスリムの共存関係の解明を重要な任務の一つとする。その成果は広く他のアジア・アフリカ地域、さらには地球社会全体において進行するムスリム・非ムスリムの共存関係、ひいては多様な民族・宗派集団の統合化とそれへの反発、という現象に的確に対応するための知見と根拠を提供することが見込まれる。

10. 研究の実施計画（800字程度）**2010年度**

20世紀に巨大都市化する以前、19世紀の中核的都市空間の把握を目標とする。都市における外部者受容機能、中核的都市空間における多民族・多宗派の住み分け・混住のメカニズム、政治運動の空間的位置などを重視する。

6月：「中東研究日本センター」にて共同研究員の顔合わせと研究方針・計画のすり合わせ・確認を行う。

2月：「中東研究日本センター」にてワークショップを開催する。

2011年度

近代国民国家成立時の難民・突発的人間移動と都市空間の拡大・変成過程を検証する。

10月：「中東研究日本センター」にてワークショップを開催し、ベイルートとイスタンブルの事例について検討を行う。

2012年度

各都市における政治・社会運動について分析する。

10月：「中東研究日本センター」にてワークショップを開催し各都市の事例について検討を行う。

2月：AA 研にて総括のワークショップを開催し、報告書を準備する。

11. 研究成果の公開計画（200 字程度）

「中東研究日本センター」で開催するワークショップについては、ウェブページなどで概要を報告する。研究過程で得られるデータ（画像資料も含めて）は、可能な限りデジタル化して公開する。研究成果報告書を英語で刊行する。

12. 応募者に求める提出書類

本課題に参画して実施を希望する調査研究内容。日本語（500 字程度）または英語(300 語程度)。